
奴さん物語

山 士老

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奴さん物語

【Zコード】

N6136A

【作者名】

山士老

【あらすじ】

「奴」入りのサブタイトルで次々と読み切り短編を書いて参りますので宜しくお願ひいたします。この「分からなくなつた奴」も人生における様々な生きざまの一面を風刺化した奴さんです。

↙分からなくなつた奴↘

外は木の葉が散り始めている。

綺麗は、ホールの襟に首をすくめて入つて行つた。

中は、やわめこていたが、丁度受けが空てこる、

「どの科にしますか」

「一寸相談したいんですけど」

「はつ、どうが悪いんですか」

「私でわないんですが、主人のことです、具合が悪いもんですから」

「どんな症状なんですか」

後に二、三並んでしまつた、

「一十九歳、先生にお会にしてからと黙つて」

受付の女の子は黙つてこる、そして

「内科を紹介しますよ」

「出来たら女の先生が宜しいんですけど」

受付は、けげんそうにしながら

「耳鼻科でいいんですか」

「は、はい」

綺麗は思わずうなずいた。

「どうしたんです、」

ネガネ^イしに振り向いて椅子を回した。

「あのー、」相談したいんですけど

「どうしたんですか」

老女医は、また聞き返した、綺麗は意を決して抑揚を出して語りだした。

「実は、主人のことですけど、、、」

「耳ですか、鼻ですか」

「両方なんですけど、、、夜になると怖いんです、、、主人は三ヶ月まえに交通事故

に会つて、頭を打ちまして、一時はどうなるかと思いましたが、内科だけの治療で

十日程度の入院で良くなつて仕事にも復帰することが出来ました、
私達は結婚して

八年になりますが未だ子供は居りません、主人が退院するさいに先
生に呼ばれまし

て後遺症が出るかも知れませんからと、言われていたんですが

女医は、後ろ向きに聞いて、

「何か症状が出たんですか」

と、急かすように言つた。

綺麗は一段と声を張り上げて、

「は、はい、一週間位前から、夜の行為が異常としか思えません」

女医が振り向いた、

「私は床につくとき、とても恐いんです、主人はスポーツで鍛え
た頑丈な体なん

です、それが寝床に入ると私に寄りついてくるんですが

声が小さくなつたり大きくなつたりしていく、

「抱きついてきて、、、行為を始めようとするとんですが、、、始
めは、私のオヘ

ソを吸つたりしていたんですね」

「下の方ではないんですか」

女医は椅子を廻して向き合つた。

「そうではないんです」

綺麗の長いまつ毛がつるんでいる、

「それがオヘソに入れようとしたんですね、私は驚いて、貴方、何するのと突き飛ばし

たんですね、私は今迄どおり気持ち良く迎え入れようとしたんですが、
、、それが、

主人は体力があるものですから何回も抱きついてきてオヘソに大きな彼を向ける

んですね、私は泣きながら、貴方こいつちではないよ、あつちだよと言
うんですけど

、、、、「

器具をガチャ、ガチャさせていた看護婦が、いつの間にか側に立つ
ている。

「それが近頃はオヘソだけではないんですね、私の鼻の穴にも、目の
中にも、私の

体のへこみや穴を探して突つ込もうとするんです、 、 、 、 肝心の下
や口には少しも

興味を示しません、 、 、 、

途切れ、 途切れに披露していく、

「一」、 三日前から一諸には休めませんので、 私は応接間に鍵を掛け
て独りで寝てい

るんですが、 夜中に一時間位ドンドン、 ドアを叩くんです」

肉付きのいい綺麗の体が、 かすかにふるえてい、 女医と看護婦が
目を見合わせて

「ヤツト笑つた。

「タベは大変だつたんですね、 夜中トイレに起きたんですね、 応接間の
ドアを開けたら

主人が毛布にくるまつて座つているんですね、 足に抱きつかれて倒され、 毛布で腰を

巻かれ、 頭に太い彼を持つてきましたね、 私は必死でした、 そんな
時、 主人は声は

出さないんですね、 息だけが荒々しくなるんですね、 真面目な顔して目
を輝かして居り

ます、私は目も鼻も両手で強くふさいで、体を横にして床について大声を上げてもがいたんです、そしたら主人は私の頭を押し付けて髪をかき分け、興奮した

彼を私の耳に差し込もうとしたんです、私はもう逃げるのに本当に必死だつたんです

す

女医が髪をかき分けて綺麗の耳をさわった、

「いじり側なんです」

彼女は右耳を向けた、耳たぶの厚みのある小さい耳が周囲を赤くして耳穴が少し青

みがかつている。

「ご主人は普段はどんなですか」

「普段は大変思いやりのある優しい人なんです、私は主人の優しさに惚れただんです」

「いえ、そうじゃなくて普段は何か変わったことは無いんですか

「はい、全然事故前と変わりません、仕事も真面目に勤めていますし、毎日の生活

も楽しく出来ているんです、ただ、時々夜のことを私が問いただすと、済まん済ま

ん気をつけるからと、可哀相なくらい何回となく詫びるのでそれ以上言えないんで

す、そしてお詫びのつもりと言つのでしょうか、前より頻繁に、帰りにおみやげを

買つて来るんです

少し間を置いて綺麗は、

「何か良い方法はないでしょうか、主人にも病院に一諸に行こうと言つんですが、

頼むからそれだけは勘弁してくれのいつてんぱりなんです、私は子供が欲しくて、

主人には色んな栄養をつけて毎晩頑張つて貰つよつて、やつていろんな具合になつて、・・・

涙を落としながら、

「先生、良い知恵を貸してください」と、哀願した。

「うーん、、、と言つても、耳鼻科だしねえ」

女医は綺麗の耳をのぞいて考へこんだ、

「やつだ、じれやつて見たがどうでしょつか」と、つぶやきながら、そばに立つて

いる看護婦に自分の耳をつまんで、

「これ持つて来て」と、告げる。了解の印へばせをして看護婦は出て行つた。

やがて、看護婦は大きな薬袋を持つて来て女医に差し出した、

女医が「これ、これ、これ」と、言いながら袋から取り出した。

綺麗は目をみはつて見つめている。

巧妙に「ムで作られた耳が三個、女医の掌に載つてゐる。

「これを貴女、セツトしていりと」

綺麗は意味が良く番み込めない、

「どれが合つかオトトイレで貴女のあわいにセツトしていりと、三つとも持つていつ

て、どれが良くフイツトするか」と、無造作に手渡した、そして

「待つて、この鏡で同じように見えるか良くみてえ」と手鏡を取り出しあやつた。

綺麗は複雑な心境と、たかなる豊かな胸を抱いてトイレ向かつた。

内鍵をきちんとして、手鏡をかざして、一つひとつ慎重に差しはさんでくわえさせ

てみた、少し大きめの耳が六日もよく合つて、きれいにフイットしている。

そして、うなじの後れ毛のよつこゴムの耳に濃い下毛がかかつている。

綺麗は思わず微笑んで、下腹に力を入れて手鏡を見つめた。

何となくゴムの耳が赤らんで見える。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6136a/>

奴さん物語

2010年10月20日19時28分発行